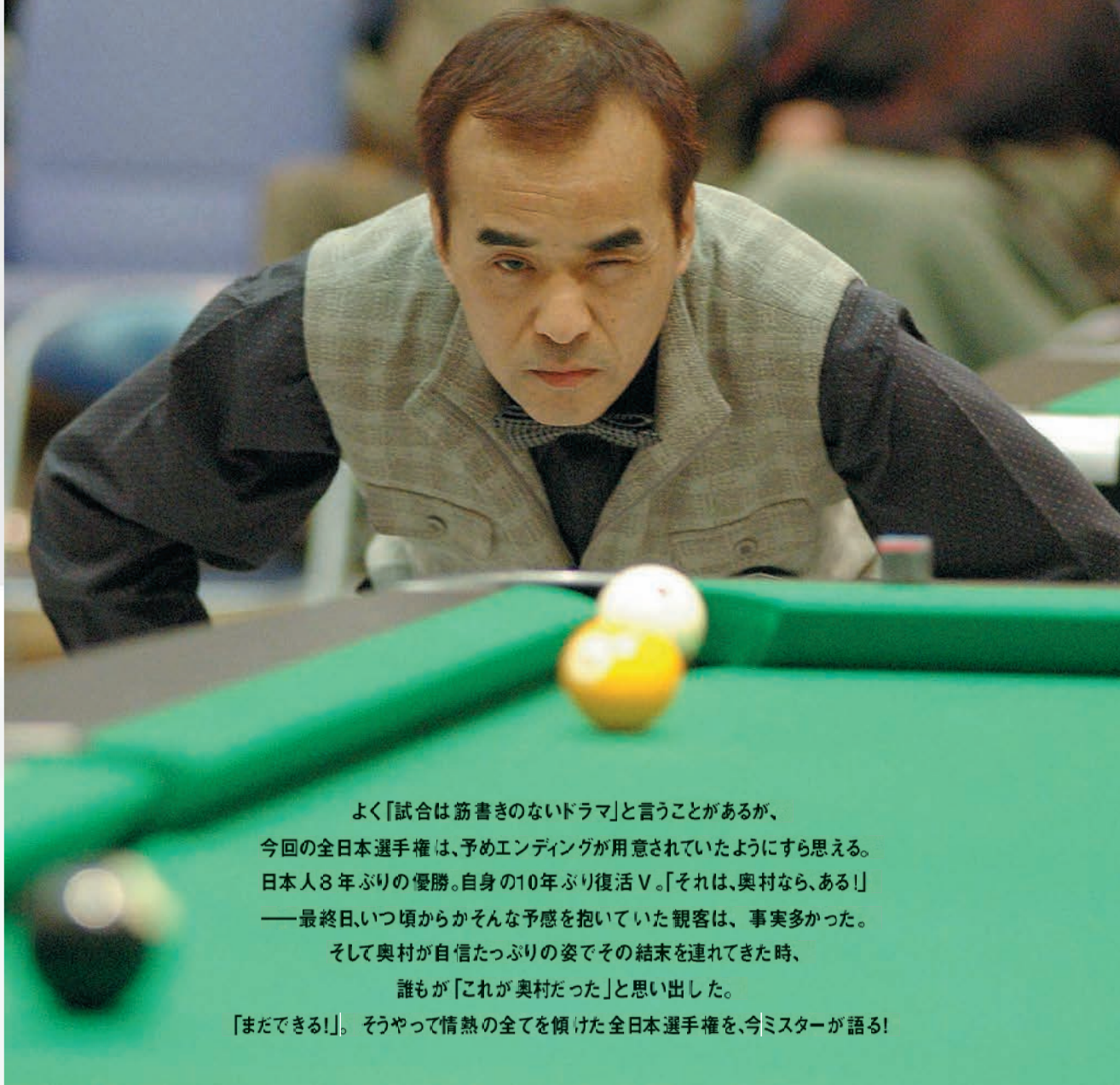


The 1st Part Exclusive Interview with Men's Division Champion

奥村健、奪還!

“ミスターポケットビリヤード”10年ぶりの戴冠

「なんだ、俺はまだできるじゃないか —
一番嬉しい勝利です」



よく「試合は筋書きのないドラマ」と言うことがあるが、
今回の全日本選手権は、予めエンディングが用意されていたようにすら思える。
日本人8年ぶりの優勝。自身の10年ぶり復活V。「それは、奥村なら、ある！」
——最終日、いつ頃からかそんな予感を抱いていた観客は、事実多かった。
そして奥村が自信たっぷりの姿でその結末を連れてきた時、
誰もが「これが奥村だった」と思い出した。
「まだできる!」。そうやって情熱の全てを傾けた全日本選手権を、今ミスターが語る!

気持ちをを入れて調整しましたね

——優勝本当におめでと〜うございませす。10年ぶり7度目の優勝。過去の勝利と比べて、今回の勝利の味は？

「もう一番嬉しいです。4連覇の時よりも、初めて勝った時よりも。一番撞きましたから。今回の勝利は、『前に進んでるな』と感じられるものだった。過去の方が嬉しいんじゃないやっちゃうからね(笑)」

——あの日の内に神奈川にお戻りになられたんですか？

「そうですね、車で。色んなことを回想しながら、静岡あたりまで自分で運転したんだけど、疲れは感じてなかった。やっぱり嬉しかったんだよね」

奥村りかプロ「運転交代した瞬間に寝てましたよ(笑)」

「(笑)さすがにそこで疲れがどっと出たのかな」

——優勝から5日程経ちますが、今の状況はどうですか？

「お店の常連さんに招かれて食事会があったりとか祝勝ムードが続いてます。この取材を最後に日常に戻るかなという感じです」

——さて、今回の戦いを振り返っていただきますが、事前になんかよい調整を積んでこられたのではないですか？

「そうですね。大会中も『やれることはやってきた』と自分に言い聞かせながら撞いてました。そのぐらい気持ちを入れて調整しましたね」

——期間はどのぐらいですか？

「2ヶ月ぐらい。日頃忘れていたり横

着していた部分を思い出して繰り返してやったりとか。毎日必ず自分なりのテーマがありました」

——テーマを一つ明かして頂くと？

「大きなテーマを言うのと、ここ2年ぐらい僕は自らのスタイル、戦い方で悩んでいて。正直、自信を失ったんです。勝てなかったし。スタイルや戦い方を見つめ直すには練習しかないです。それができたからこそ、選手権でも自分を貫くことができましたね」

——奥村流の戦い方、その中身は何でしょうか。

「例えば、僕のように年齢が上がってくると、『リードして戦う』形がものすごい大事だと思います。エネルギーを消費しないから徐々に温存できる。だから、どの試合も序盤、行ける時には一気に行こうと」

——選手権ではブレイクも当たっていましたね。

「それも調整しましたね。やっぱりブレイクは大事ですから。あと、気持ちの面で、いいタイミングだったのがキーズさんの取材(05年12月号)。ああいいう取材を受けた以上『自分はまだまだやらなければいけない』という使命感も出てきましたね」

——そうおっしゃって頂き光栄です。その調整中のいい状態を、選手権一週間前の東GP最終戦(優勝)で見ることができました。尻上がりにいいリズムで撞いておられましたね。

「あの試合はものすごく得るものがありました。若くてガンガン来る土方(隼斗)君に勝ったことも自信になっ

た。偉そうですね、あの勝利は、選手権に向けて想像していた通りの流れになったというか。当然あの試合にも気合は入ってましたが、ホップステツプみたいな形で臨みたいと思っていたのでいい手応えを得ましたね」

レイズ戦前日から楽しみだした

——選手権の試合の話に移っていきませんが、まず特設のテールコンディションはいかがでしたか？

「最高でした。想像していた通りの転び方。あのコンディションも事前にイメージして調整していたから、スーッと入れましたよ」

——予選ラウンドですが、山場はありましたでしょうか。

「2つめの石村君との時が危なかった。彼もいい球撞いていてね。6-6に追い付かれて次のゲーム、彼が取り切りの途中でスクラッチしたんです。正直助かりました。次の高橋君との試合は……今回は彼がツキがなかったと思う。ブレイクスクラッチが3回はあったかな。互いに内容はそんなに良くなかったと思うけれど、彼の方がより気負ったのかも引けない」

——決勝トーナメント、初戦はキアムコでした。

「以前、選手権で彼にまくられて負けてます。今回は序盤に彼が④を外したんですよ。「あ、ちょっときてるな」と感じた。あれで楽になったね。僕もマスワリが出て4-0ぐらいになっ

た。レイズだから。彼のベースにならないように集中し続けました」

——決勝トーナメントはショットクロックが入っていましたが、特に気にされている様子もなかったですね。

「全くなかったです。すごく落ち着いていた。昔、展開が悪い時はあの『30秒!』でイライラしたこともありましたが、あの後の15秒間って結構長いんですよ。そのタイミングも大分掴んでいたし、問題なかったです」

——そういえば、今年はメガネをかけたかったですね。

「メガネをかけるとボールはくつきり見えるけど、全体を把握しづらいので、裸眼でいこうと。メガネなしで練習してきたし。持つて行くと使うっちゃうんで、置いて行きました」

——薄いカッターは「勘」ですか？

「そう、そこは慣れて。前みたいにはつちりは見えないですから。だから予選で何回か、薄め一杯を狙ったら空振りして、ケツから(クッションから)当たったのもありました(笑)」

——キアムコを倒して次がレイズ。このカードは久しぶりですね。

「7、8年ぶりぐらいですね。僕も前日からすごい楽しみだった。頑張っているゲームをしようと思って、前の晩は精をつけに焼肉食べに行きました。食事は大事ですから。その後はとてもよく眠れました」

何が降りて来ましたよ、多分

——食事と睡眠の効果がありませんか？



奥村健、庄巻の全8勝

予選ステージ2

vs 森村雅一 (JPBA)	9-2
vs 石村治政 (JPBA)	9-6
vs 高橋邦彦 (JPBA)	9-6

決勝トーナメント

vs W・キアムコ (フィリピン)	11-3
vs E・レイズ (フィリピン)	11-7
vs 楊清順 (台湾)	11-4
vs 草野寿 (JPBA)	11-10
vs M・イモネン (フィンランド)	11-5

ね。レイズ戦はいきなり3連マススタートでした。

「3発出てました？ いいスタート切りましたね(笑)。僕は夢中だったから覚えてないんです」

「場内の誰もが『奥村さん、乗ってるな』と言っていました。実際に撞いていてどうでしたか？」

「今回ずつとそうでしたけど、迷いはないためにリズムが良かったですね。それだけ自分の調子がよく、ショットに自信があったからでしょうね。エフレンにああいう内容で勝てたのは大きいですよ」

「『よし、勝った！』という嬉しさはありましたか？」

「確かに嬉しいですよ。でも、『彼も人間なんだな』という部分を感じました。あれだけ僕にいい感じに撞かれると、プレッシャーもあつたんだらうよね。僕は僕で『彼に勝って、次、変な負け方はできない』と思いました」

「『その楊清順戦ですが、中盤に一挙6連取もあり、内容的にも完勝と言え」と

「過去、楊君と戦った時は僕がほとんど勝ってます。あんなに強い選手なんだけど……相性かな。これは彼に聞かないとわからない。僕のことを嫌いなのか苦手なのか(笑)。第3ゲームで、彼がサイドポケットをまたぐ薄い⑦を外したじゃない？ あれは大きかった。そこを取って次がマスワリで4-0ですから。決勝に入って、この試合が一番楽だったかなあ」

「そしてセミ・ファイナルは日本人

対決となりました。

「あの日草野君は頑張ってたね。気迫を感じたし、上手く撞いていたし、ブレイクも良かった。この試合も途中まで完全に僕が押されてました」

「3-9までリードされた時、どういうお気持ちでしたか？」

「諦めとかじゃなく、開き直ってました。『回って来たら取り切ろう』です。自分の番になったら一生懸命やろう。多分、みんなそうだと思います」

「その言葉通り、ぐいぐい追いかけきて、4-9の段階で、③のキックインから取り切り。そして3連マス。あの③は狙ってましたか？」

「狙いに行ってます。外れてもいい形を残さない加減で撞いています。……でも、中盤から何かが降りて来てましたよ、多分(笑)。普段なかなか3-9からはマクれないです。ただ、僕が第18ゲームで真つ直ぐの③をミスした時は、負けを覚悟しました。あれはポイントヘッドもいいところ」

「草野プロも10-8とした後、③を入れて、引き球でものすごいスクラッチをしました。驚いた(笑)。ミスはミスだけど、技術的に見て、なかなか普通の人にはできないよ。すごいキュー切れだね。あんなの見たことない(笑)」

「そこを奥村プロが取り切って、その後フルゲームになりました。改めて握手しに行きました。この1ゲームでどちらかの決勝行きが決まる。悔いなく撞こうと」

「結果、相手に撞かせなかった訳で

すが(笑)。

「あれは……僕の方がツイてたというか(笑)。形が良かった。どこかにトランプがあったら勝負はわからなかった。でもね、草野君はこれからもっと出てくるでしょう。今、いい経験してるよね。エイトボールでエフレンに勝つたし、色々なゲームが撞けるからね。彼を見て日本もまだ捨てたものじゃないって思います」

声援は全てプラスになりました

「ファイナルに立つのは1998年(台湾の張皓評に負け準優勝)以来でしたが、意識されましたか？」

「いや、あんまりいつ以来とか考えなかった。冷静だったのかな、今までにない感じでスーッと試合に入れました。すごくいい経験をさせてもらいました。『あ、これが気後れすることのない入り方なのかな』というね」

「過去イモネンとの対戦は？」

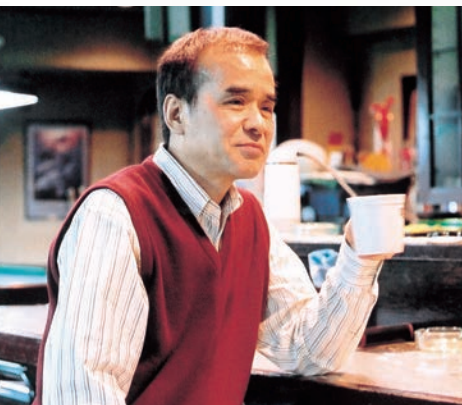
「負け越してるね。1勝3敗かな？ 春のジャパンオープンの前選最終で、バチバチにやられました。いいプレイヤーですよ。ショットが重いし、キュー切れもあるし」

「このゲーム、第1ゲームはイモネンが取りましたが、そこからほぼ最後まで奥村プロペースでした。『ホント冷静だね。日本でやってる大会だから当たり前なのかもしれないけど、みんなの声援をものすごく体感していた。その声援はプレッシャーに変わるのではなく、全てがプラスにな

インターネットで
絶賛配信中!

ファイナル、セミ・ファイナルをはじめ奥村プロの全日本選手権での戦い振りにはインターネットTVで絶賛配信中! 詳しくは34ページへ。

2005



ってました。集中してたし、よく見えていた。あのファイナルの自分の状態というのは、ビリヤード人生にも大きいと思う。「よく頑張った」と自分に言えます」

「一方、イモネンは準優勝続きというプレッシャーがあったのか、妙に熱くなっていた様子でしたね。

「僕もちらつとそう思いました。気負ってるかなど。彼は元々熱いプレイヤーですけどね」

「勝利を確信した瞬間というのはありましたか？」

「いや、最後の最後までなかったです」
「あの残り2球はいやらしい形でした。さすがに腕にきましたか？」

「ちょっときましたね。⑦から少し出しミスして⑧に厚くなって……言ってみればあの⑧は入れイチ。結局⑨が薄くなりました。あの⑨は僕はノー（ヒネリなし）じゃ入らないです。若い人は入るだろうけど。あの球は逆で狙った方が厚みを取りやすい。でも、きれいに入りましたねえ（笑）。あれこそ練習してて良かった」ですよ。ボールがすーっと走ってるのを見た時に「勝った」です」

「最後のガッツポーズが格好良かったです。あの一連のアクション、覚えてらっしゃいますか？」
「いや、あんまりですね（苦笑）」
「奥様との抱擁もありました。」

「ああ、それは覚えてます。自然に出ましたね。りかは僕のコンディションのことも気遣ってくれて、僕より疲れただろうから」

やっぱり練習です。特に日本人は

「53歳での勝利。格別な思いはありませんでしょうか？」

「なんだ、俺はまだできるじゃないか」という気持ちになりました。僕はニック・バーナーさんを尊敬しているんですが、彼は50過ぎで世界選手権で勝っている（1999年）。彼と同じように「やってやれないことはない」と実感しました。僕がこの年齢でできるんだから、若い人にもきつとできるし、まだまだ日本は行けますよ。あの日僕は、「氣」で負けてるといふことはなかったはず。ああいう状態になれば誰でも戦えるんです。それを感じ取ってくればいいと思います」

「ご自身のプレーには100点満点をあげられますか？」

「そうですね。あの舞台をイメージしてトレーニングできたことが本当に効いた。正直、僕は心臓が強い方ではないと思ってます。でも、選手権にはしびれる局面が必ずいっばい出て来る。だから、そこでしびれないで撞けるぐらいの練習をしないとイケない。これがまた練習した球がよく出て来るんですよ、本番で（笑）」

「奥村プロの戦いは全て練習から始まるんですね。」
「やっぱり練習ですよ、特に日本人はね。それでようやく世界と同等に戦えるんじゃないかな。ハートじゃ農耕民族は狩猟民族に勝てないですよ。僕は「手球を確実に持って行く」という戦い方をしていますが、それは例えば、

世界の若い子らと僕は入れの許容範囲が違うと思うから、正確な出しで勝負していくしかない、ということですよ。そのためには練習ですよ」

「今の若手プレイヤーにも大きな参考になるお言葉です。」

「若い人がどれだけ練習して試合に行けるかでしょう、これからの日本は。みんな球を撞いているとは思いますが、それぞれに練習方法があると思う。でも、大事なのはその時に「舞台」をイメージできているか。それができる人は上がって来ると思います」

「練習ありきの試合。奥村プロはまさにそれを実践し、最良の2005年シーズンとなりましたね。」

「その通りですね。これで来年もさらに前に進んでいける気がするし、「まだ伸びるな」ということすら思ってますよ」

「年末までのご予定は？」

「12月11日のロリエオープン（神奈川）が今年最後の試合です。年末年始はいつも通りです。お店にいますね」

「2006年の試合ペースは？」

「恐らく2005年と同じぐらいだと思います。ですので出られない試合もあると思いますが」

「わかりました。最後にファンにメッセージを頂きますでしょうか。」

「みなさんの応援で素晴らしいゲームができ、優勝できたことを、ファンの方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました」

「こちらこそ素晴らしいプレーをありがとうございました。」

Takeshi Okumura